資料１

令和 2年8月18日 作成

なぜ 今 集落支援員制度 なのか？

平成１７年１０月	◇ 平成の大合併 １市２村（旧石狩市、旧厚田村、旧浜益村）	◇ 地域自治区（厚田区・浜益区）選択 ↓ 「厚田区地域協議会」「厚田支所」 設置	◇ 住民自治の推進 ・ 協働の取り組み ↓ 地域振興団体発足（H18 ～ H24　７団体誕生）	地域の中に 自分が中心となり 地域を引っ張っていく「トリガー的人材」がいた
平成２４年度	◇「地域おこし協力隊活用検討委員会」設置 ↓ H25年10月導入決定（厚田・浜益 各２名）	◇ 地域おこし協力隊 採用経過　※ 赤字はOB・OG H26年4月　2名（小島・森田（旧姓：沼倉）） H29年5月　2名（今野・野呂） H30年5月　1名（江崎） H31年5月　1名（吉川）　7月 1名（飯塚） R02年5月　1名（秋葉）	◇ 外部の視点で地域活性化を目指す ↓ ６年間で ８人導入（退任後は地元定住）	外部人材：地域おこし協力隊
平成２５年０９月	◇ 厚田区が目指す将来の姿（厚田魅力の島） ↓ 『近説遠来』（地域協議会 第4期委員総括）	◇『近説遠来』中国 孔子の論語 ↓ 「住んで良し　訪れて良し」	◇「近説遠来」具現化に向けた取り組み 開始 ↓ 『厚田カンパニー構想の実現』	①「複合施設建設構想策定委員会」⇒ 道の駅　⇒『遠来の実現』 ②「アンケート会議」⇒ 『近説のヒント（地域意識の確認）』 ③「地域交通サービス検討委員会」⇒『近説の具現化（第1弾）』
１１月	◇ 「複合施設建設構想策定委員会」設置 ↓ 策定委員会１２回、分科会３回開催（18名→28名）	◇ 重点「道の駅」選出（平成27年1月）	◇ 平成30年4月27日 道の駅 石狩「あいろーど厚田」 開業	○ １年目　612,702人　1億3千万円 ○ ２年目　434,086人　9千９百万円
平成２９年０6月	◇ ふるさと創生プロジェクト 「厚田カンパニー構想」策定 ↓ ○ 住民同士が共に支え合う街 ○ 必要とされる拠点づくり	○ できる事を できる人が できる時に・・・ ○ 共に支え合う仕組みの確立 ○ 人が人を呼ぶ魅力の街 ○ 近説遠来の実現	◇ 支え合いの街を地域は望んでいるか？ ↓「アンケート調査の実施」 ○住民意識（郷土愛）　○日常生活の問題点 ○防災意識 ○地域交通の考え方 ○地域の関わり	◇ 地域活性化のカギとなる カンパニー構想 ↓ アンケート調査 最終報告書（P69 ～ 参照） 『Ⅳ.分析結果を踏まえた提言』
１１月	◇ アンケート会議 ↓ ○ H30年1～2月　アンケート調査実施 ○ H31年3月　最終報告書	◇ 調査対象者　高校生（15歳）以上の 1,500人 ・回収率　約90%（1,346人） ↓ ○ 生活が不便　○公共交通の問題 ○少子高齢化・人口減少	◇「意見する人」「支援する人」 「アイディアを出す人」は大勢いるが… ↓ 自分が中心となって地域を引っ張っていく 「トリガー的人材」がいない	◇ アンケート調査（最終報告書 P70、P78） ↓ ○ 地域を革新的にけん引する人材（トリガー的人材）を探すことは極めて難しい ○ 少子高齢化・過疎化が進むと 地域のために汗を流してくれる人材確保が難しい
平成３１年０４月	◇ 地域交通サービス検討委員会　設置 ↓ ○ H31年4～11月 準備会　○ R01年12月～ 委員会	◇ 聞き取り調査（R02年2月：需要度調査） ↓ ○ 利用者を見極める（需要度 5→ ４７世帯）	◇ 既存交通を活かす取り組み（共存・利用促進） ↓ ○ ライサポ　○中央バス　○ダイコク交通	①日常生活の不便さの解消 ②安心の医療・福祉 ③子育て環境の充実 ④移住・定住 → ４つの共通する社会基盤 『地域交通の充実』 ◇ 目　標　『便利な田舎の実現』 ↓ ○ R03年4月～　試行運行　○ R04年4月～　本格運行
令和０２年０８月	◇ 集落支援員制度 検討委員会 設置（R2年8月） ↓ ○ R02年07月 準備会設置　○ R02年08月～ 委員会	◇ 内部の実情に詳しい人材 ↓ ○「トリガー的人材」の登用	◇ 検討委員会（R2年8月～） ↓「必要性・導入の可否を検討」 ○ 先進地視察　○地域が求める支援メニュー抽出	内部人材 ： 集落支援員（トリガー）